

鳥取県八頭郡郡家町

下坂1号墓

1990

郡家町教育委員会

序 文

郡家町は、八頭郡内においては、原始・古代遺跡の多さには抜きん出ている歴史豊かな風土と自然に恵まれた環境にあります。しかしながら、近年の各種開発事業の増加に伴い生活環境も大きく変貌しつつあります。

このような状況のもとで先人の残した文化的遺産としての埋蔵文化財も大きく影響を受けていますが、極力調整することによってこれを後世に残し伝えることは、国民の責務であると考えます。この下坂1号墓は、関係各位との協議、調整を行った結果、記録保存という形で残すことによりその趣旨に沿うことにしたものです。

今回、この調査を行うにあたり、地元下坂地区をはじめ惜しみない援助と協力を頂いた関係者各位に対して厚くお礼申し上げます。

なお、ささやかな冊子ではありますが、本書が町民の郷土研究の一助として活用され、埋蔵文化財の保護意識の高揚に役立てて頂ければ幸いです。

平成2年3月

郡家町教育委員会

教育長 北 村 一 利

例 言

1. 本書は、鳥取県八頭郡郡家町大字下坂字杜表平・字大池谷に所在する下坂1号墓の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、1989年10月6日から12月9日まで現地作業を行い、以後1990年1月23日まで整理作業を行った。
3. 本書に使用した方位は、第1図を除き全て磁北を示す。
4. 写真図版中の番号は、遺物実測図の番号に対応する。
5. 本書の執筆、編集は中野知照が行った。
6. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、郡家町教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体 郡家町教育委員会 教育長 北村 一利

調査主任 中野 知照

事務局 教育委員会次長 広谷 龍亮

社会教育主事 市村 茂

調査指導 鳥取県埋蔵文化財センター

現地作業員 清水好夫、山本義一、松本英俊、木村一三、清水なみ子

整理作業員 山本静子、伊藤恵美子、山崎保子

本文目次

第1章 調査の経過	(1)
第2章 位置と環境	(1)
第3章 調査の概要	(2)
第1節 検出した遺構	(4)
1. 弥生時代の遺構	(8)
2. その他の遺構	(15)
第2節 出土遺物	(16)
第4章 ま と め	(19)

挿 図 目 次

第1図 郡家町遺跡分布図……………(3)	第9図 第3主体部遺構図……………(11)
第2図 下坂1号墓地形実測図……………(4)	第10図 第4主体部遺構図……………(12)
第3図 下坂1号墓遺構配置図……………(5・6)	第11図 第5主体部遺構図……………(13)
第4図 下坂1号墓土層断面図……………(7)	第12図 第6主体部遺構図……………(14)
第5図 第1・2主体部平面、断面図……………(8)	第13図 第7主体部遺構図……………(15)
第6図 第1主体部遺構図……………(9)	第14図 下坂1号墓出土遺物実測図……………(17)
第7図 第1主体部墓域掘方遺構図……………(10)	第15図 その他の遺物実測図……………(18)
第8図 第2主体部遺構図……………(10)	

挿 表 目 次

表1 弥生時代遺物観察表……………(21)
表2 その他の遺物観察表……………(21)
表3 弥生時代木棺墓一覧表……………(22)

図 版

図版1 [1]下坂1号墓調査前全景(南より) [2]下坂1号墓調査風景(南より) [3]下坂1号墓表土除去後全景(南より) [4]下坂1号墓調査後全景(南より)
図版2 [1]第1・2主体部掘方検出状況(南より) [2]第1主体部土層断面状況(東より) [3]第1主体部木棺痕検出状況(北より) [4]第1主体部遺構検出状況(南より)
図版3 [1]第2主体部土層断面状況(東より) [2]第2主体部遺構検出状況(南より) [3]第3主体部掘方検出状況(南より) [4]第3主体部遺構検出状況(南より)
図版4 [1]第4主体部掘方検出状況(南より) [2]第4主体部遺構検出状況(南より) [3]第5主体部掘方検出状況(南より) [4]第5主体部遺構検出状況(北より)
図版5 [1]第6・7主体部掘方検出状況(南より) [2]第6・7主体部遺構検出状況(南より) [3]第6主体部遺構検出状況(東より) [4]第7主体部遺構検出状況(東より)
図版6 [1]溝状遺構土層断面状況(東より) [2]第3主体部土層断面状況(東より) [3]第5主体部土層断面状況(東より) [4]第6主体部土層断面状況(北より)

第 1 章 調査の経過

郡家町の北部、私都川の中流域から下流域は、肥沃な水田地帯が広がった地域である。この私都川に面した丘陵地には多くの先人の残した遺跡が点在しているが、各種開発事業によって、僅かであるがその姿を変えつつある。

下坂1号墳の所在する下坂地区においても、1987年に同地区の字大地谷に砂防ダムが建設されるのに伴い、窯跡群の発掘調査を行っている。1989年4月、下坂地区で砂防ダムの導水路計画予定地内の丘陵先端部の土砂除去計画を知ることとなった。この計画を受けて郡家町教育委員会では、現地踏査を実施するとともに、関係機関と協議を行った。現地調査によって、当該地内に古墳1基と平坦面を確認した。

関係機関との協議の結果、現状での保護保存が困難なため、当初予想された古墳1基プラスαの平坦面について発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、郡家町教育委員会が調査主体となり、郡家土木出張所の委託を受けて実施した。

調査は、1989年10月6日より現地調査を開始し12月8日に現地での調査を終了し、翌9日には現地説明会を開催した。その後、1990年1月23日までを整理期間として、遺物の水洗・注記・実測、図面整理、報告書作製を行った。

現地での抜開、地形測量の段階では、調査対象地がやや方形を呈した古墳と予想されたが、調査を進めるうち郡家町内では初めての弥生時代台状墓であることが判明した。また調査地北側の平坦面においては、中世に墓域として利用されていることも知られた。

調査にあたっては、一部工事予定地外に遺構の広がり認められたこともあり、土地所有者である山岡 誠氏の快諾を得たことをここに記して深謝します。また、関係各機関、町民各位の文化財保護に対する理解と協力、指導・助言をいただいた。記して感謝したい。

第 2 章 位置と環境

地理的環境

下坂1号墓は、鳥取県八頭郡郡家町大字下坂字下大地谷に所在し、JR郡家駅の北東約2kmの地点に位置する。

郡家町は、鳥取県東部の最大河川である千代川に流入する八東川と私都川に挟まれた流域に立地する。北側は鳥取市と国府町に接し、西側は河原町、南側は船岡町と八東町、東側は兵庫県に隣接する。町内の東端は、私都川が源を発する鷹ノ山を擁している。

下坂1号墓は、私都川流域に所在している。私都川は、一旦、北西に流下した後、南西

に流れを替え、八東川に合流して千代川に流れ込んでいる。私都川は、郡家町中央部で北西から南西方向に屈曲する部分の南側に砂礫台地を形成させている。この砂礫台地に突き出した丘陵尾根の先端部分に下坂1号墓が位置している。

歴史的環境

郡家町の私都川下流域は、遺跡の存在が多く知られた地域である。

縄文時代の遺跡としては、八東川下流域に面した西御門遺跡や、私都川に挟まれた段丘上に所在する万代寺遺跡が知られるのみであるが、石斧や深鉢形土器が出土しており縄文時代後期（約3000～4000年前）の生活の痕跡がみとれる。

弥生時代においては、私都川中流域から下流域にかけての南側に展開する段丘上に山田遺跡や、銅鐸の出土で知られる下坂遺跡がみられる。今回、確認した下坂1号墓もこの流域に所属する。また、私都川下流の末端部分の段丘上に位置する万代寺遺跡においても、木棺墓群の存在が知られている。これら弥生時代の遺跡は、段丘上に展開しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地に営んだ水田耕作を生産基盤とした農耕集落の広がりが看取される。

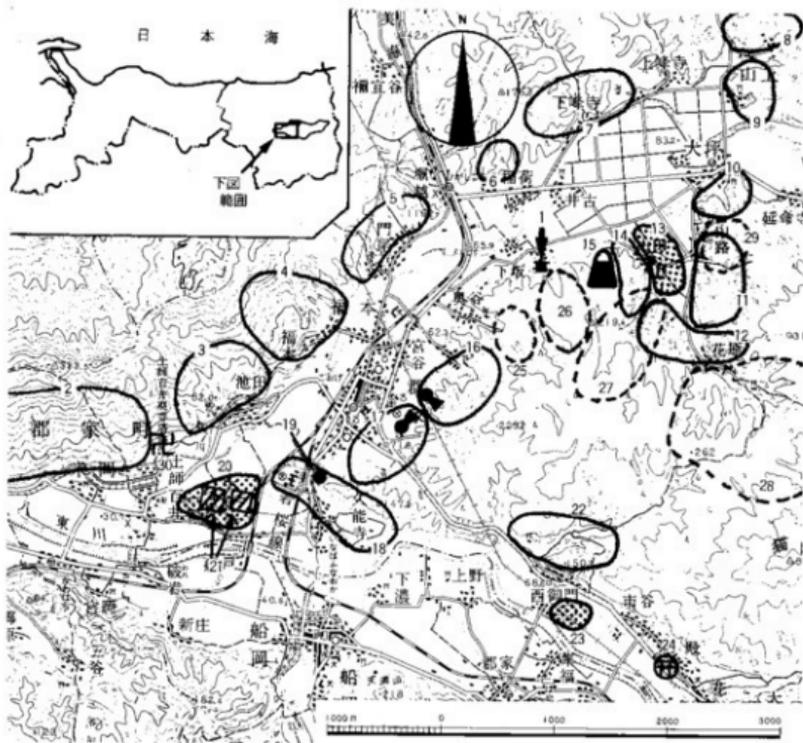
古墳時代以降、私都川流域を中心として遺跡の数は飛躍的に増加する。下坂1号墓や万代寺木棺墓群に象徴される弥生時代の墓制に続く古墳時代前期の遺跡は少なく、山田遺跡にその痕跡が認められるのみである。古墳時代中期では、万代寺遺跡の東方丘陵上の御建山古墳が作られ、また、下坂1号墓の北方、私都川を挟んで稲荷古墳群がみられる。これらは、出土遺物より5世紀末葉から6世紀初頭の年代が考えられており、私都川下流域および中流域の盟主の古墳といえる。古墳時代後期になると、郡家古墳群では寺山古墳、宮谷古墳群では宮谷1号墳の約30～40m級の前方後円墳が作られ、御建山古墳に続く時期の盟主墳と考えられる。また、この時期になると、私都川流域を見下ろす丘陵斜面には、横穴式石室や石棺を内部主体とした10m前後の群集墳が営まれている。これら群集墳のみられる地域には、寺院跡や官衙跡ならびに窯跡群なども認められている。

郡家町北西部の霊石山山麓では、白鳳時代後期の法起寺式の伽藍配置をもつ土師百井廃寺の存在が知られ、万代寺遺跡においては、八上郡郡衙跡と考えられる掘立柱建物群が確認されている。これらの寺院跡や官衙跡より出土した瓦片、鬘尾片、須恵器雑器、円面硯などが、私都川中流域から下流域にかけての丘陵斜面に作られた窯跡群より供給されていたことが知られる。

第3章 調査の概要

調査に際し、以下の調査方針をたて実施することとした。

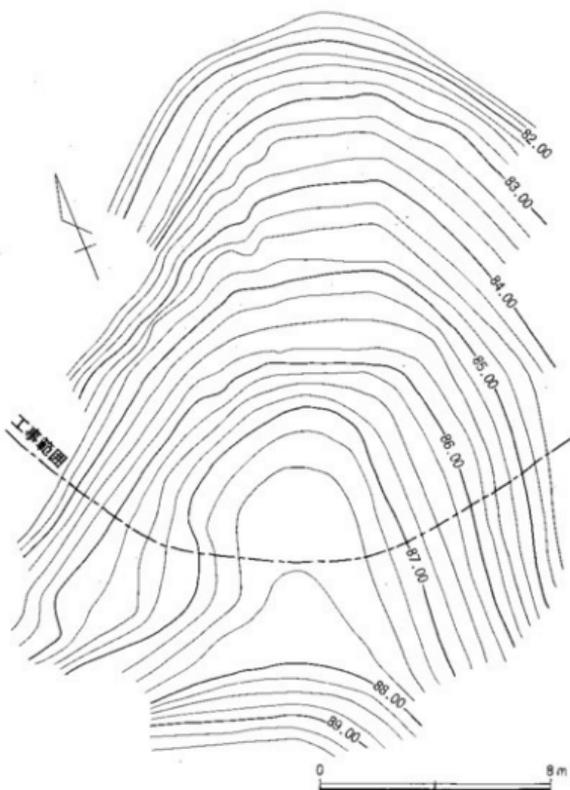
下坂1号墓は、当初、地形観察によって一辺10m前後の方形墳と推測がされた。このた



- | | | | | | |
|--|--------|--|------|---|-------|
|  | 遺跡、散布地 |  | 官衙遺跡 |  | 廢寺跡 |
|  | 前方後円墳 |  | 窯跡群 |  | 銅鐸出土地 |
|  | 古墳群 |  | 式内社 | | |

- | | | |
|--------------|------------------|----------------|
| 1. 下坂1号墓(弥生) | 11. 山路古墳群 | 21. 八上郡衙跡 |
| 2. 米岡古墳群 | 12. 花原古墳群 | 22. 西御門古墳群 |
| 3. 池田古墳群 | 13. 山田遺跡(弥生~古墳) | 23. 西御門遺跡 |
| 4. 福本古墳群 | 14. 山田古墳群 | 24. 和多理神社(式内社) |
| 5. 門尾古墳群 | 15. 下坂遺跡(銅鐸出土地) | 25. 奥谷窯跡群 |
| 6. 福河古墳群 | 16. 宮谷古墳群 | 26. 下坂窯跡群 |
| 7. 下峰寺古墳群 | 17. 郡家古墳群 | 27. 山田窯跡群 |
| 8. 桑山ノ上古墳群 | 18. 久能寺古墳群 | 28. 花原窯跡群 |
| 9. 山ノ上古墳群 | 19. 御建山古墳 | 29. 山路窯跡群 |
| 10. 大坪古墳群 | 20. 万代寺遺跡(弥生~奈良) | 30. 土師百井庵寺(白鳳) |

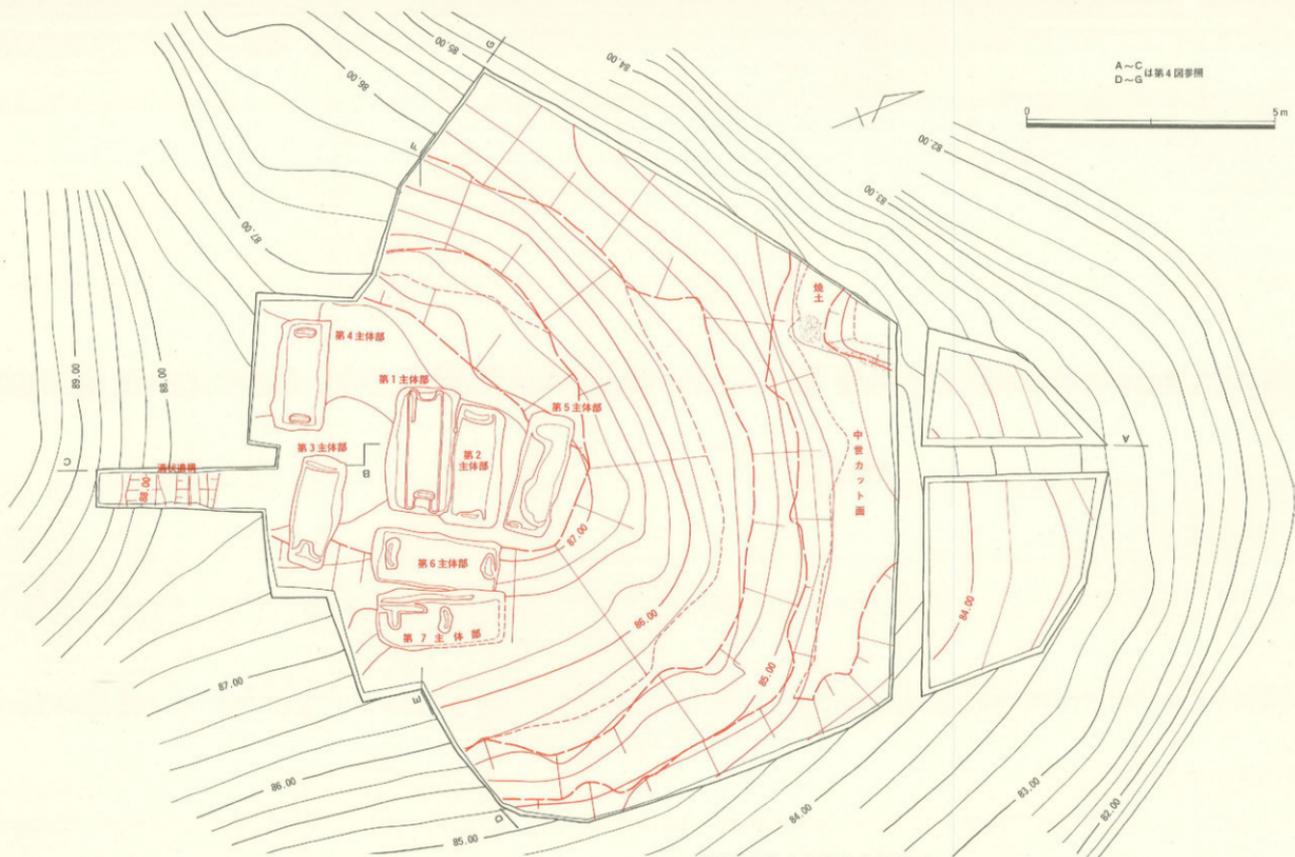
第1図 郡家町遺跡分布図



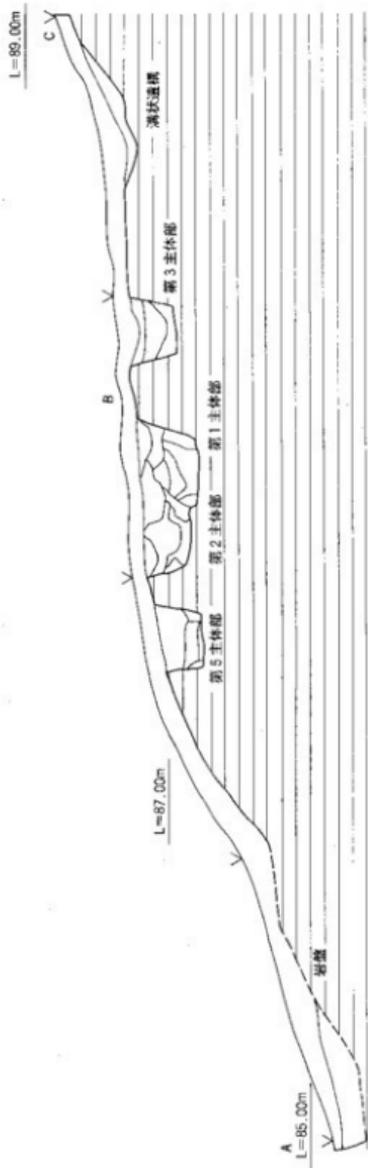
第2図 下坂1号基地形実測図

め、発掘調査は古墳築造に関する全面積を対象とし、古墳築造に伴う地山整形は全面にわたって、墳丘盛土をすべて除去し露出して観察を行う。また、古墳築造に関する他の遺構及び中世墓等の存在を考慮して最大限広範囲を調査する。但し、工事施行範囲外に及ぶものについては、地権者、関係機関との協議によってトレンチ調査を行うこととした。

調査では、当該古墳が、地山整形のみによって作られた弥生時代後期の台状墓であることが判明した。埋葬施設は7基確認され、全て木棺直葬墓であり、一部工事施行範囲外に広がるものもみられたが、土地所有者の快諾を得て観察することができた。台状墓の北側斜面ではカット面が確認され、一部に焼土面や中世陶器、北宋銭などの出土をみたことにより中世墓の存在が推察されたが、これに伴う明確な遺構は検出できなかった。



第3回 下坂1号基壇構配置図



第4回 下坂1号墓土層断面図

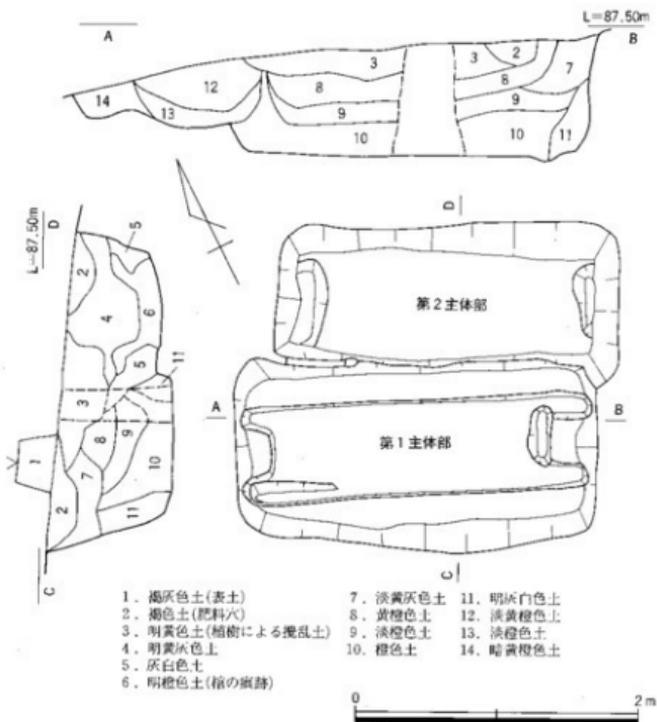
第1節 検出した遺構

調査により前述の如く、台状墓の頂部平坦面で木棺直葬墓7基と、頂部南端で溝状遺構をトレンチ調査によって確認した。木棺直葬墓は、7基のうち5基は尾根軸線に直交して作られていた。他の2基は、先行する埋葬施設に制約され、頂部から斜面に移行する部分に作られていた。中世カット面は、尾根軸線に直交して作られており、焼土面は西側において認められた。おおむね以上の様な調査を行ったが、以下、各遺構について詳細な説明を加えていく。

1. 弥生時代の遺構 (第3図)

調査は、尾根軸筋にベルトを設定し、頂部南側の工事範囲外の部分にトレンチを設け行ったが、トレンチ内において墓域を区割すると思われる溝状遺構を確認した。頂部および北東部、北西部の斜面では、現地表面下15~30cmで地山(岩盤)に当たり、いわゆる盛土はみられなかった。

台状墓 北西に派生した丘陵の先端部分が私都川南側に形成した砂礫台地に接するあ



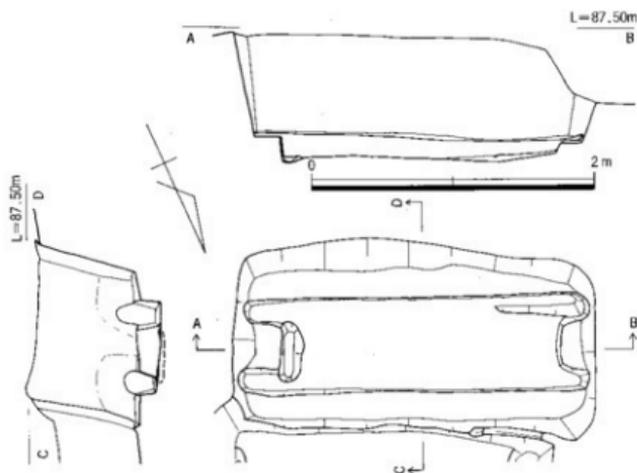
第5図 第1・2主体部平面断面図

たりで、北東に向きをかえる尾根の末端部分に築かれている。尾根の先端部分の地山を削り出し、南側には尾根筋に直交する溝を掘り墓域を区割している。斜面の北側と東側には0.6～1.0mの平坦面が廻り、台状墓の裾部を形成しているものと思われる。台状墓周辺は、中世のカット面や丘陵裾部の墓地造成など後世に削平・改変されているため、台状墓の基本形は不明な点が多いが、方形のプランを呈していたと思われる。この場合、台状墓の規模は東西約12m、南北12m（周溝中心部よりは10.6m）、高さ2mを測る。

埋葬施設 台状墓に伴う埋葬施設としては同一墓域内に7基の木棺直葬墓が確認された。

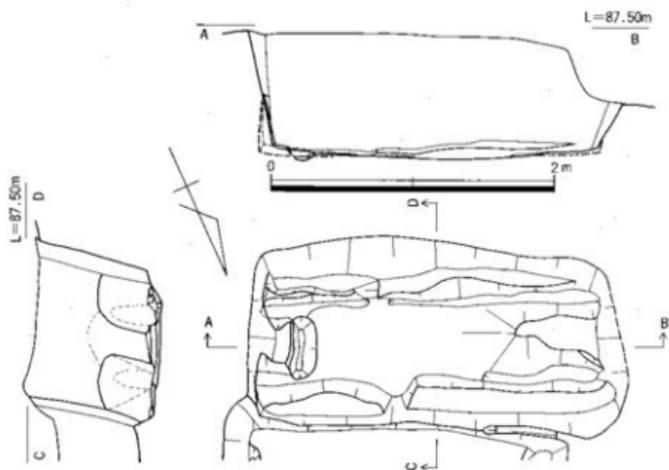
(1) 第1主体部（第5・6・7図、図版2）

墓域区画内の中央部に位置し、検出された主体部の中では最大の規模をもつ木棺直葬墓である。墓壇の長軸265cm、短軸135cm（推定）、検出面よりの深さは86cmを測る。墓壇平面は隅丸長方形を呈し、主軸方位はN68°Wである。南北それぞれの長壁はやや広がり気味に立ち上り、横断面は逆台形を呈するのに対し、東西小口側の壁部はほぼ垂直に立ち上る。底面は不整な隅丸長方形を呈し、南北それぞれの長壁下部と小口側の壁下部に段をつけている。この段は明瞭な稜をもたないが、棺材固定のための掘り込みによって形成されたものと考えられる。小口側の壁部の下半には、側板をはめ込むために生じたアーチ状の掘り込み痕がみられる。南東隅には、棺材固定用の掘り込みが二重になっており、あるいは二重木棺であった可能性も示唆される。東側の小口板用掘り込みは、長軸45cm、幅19cm、深さ4.2cmを測る。西側には顕著な小口板用掘り込みはみられなかったが、墓壇内埋土の観察

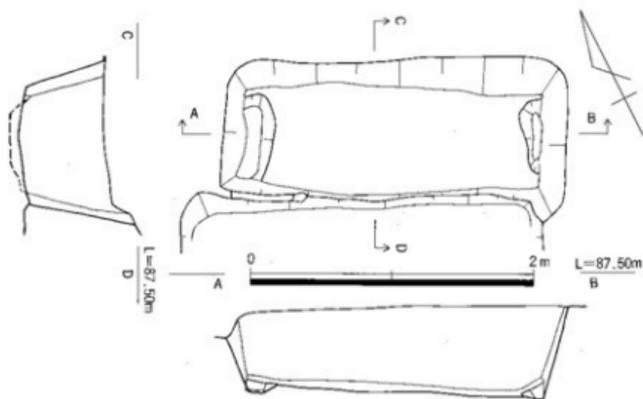


第6図 第1主体部遺構図

により棺の裏込めの状況が確認できており、両小口間の距離は約200cmを測る。小口板用掘り込みの底部の幅3～6cmであることにより、小口間の内測は185cm前後と推測される。側板用掘り込みは、南側のほぼ全長と北側では両サイドにみられるが、浅い掘り込みである。木棺は組み合せ式で、規模は縦244cm、横58～66cm、高さ53cm程度と推定される。本木棺が二重木棺であった場合その横幅は、最大幅100cm前後を測る。底面の標高は86.56mである。



第7図 第1主体部墓塚掘方遺構図



第8図 第2主体部遺構図

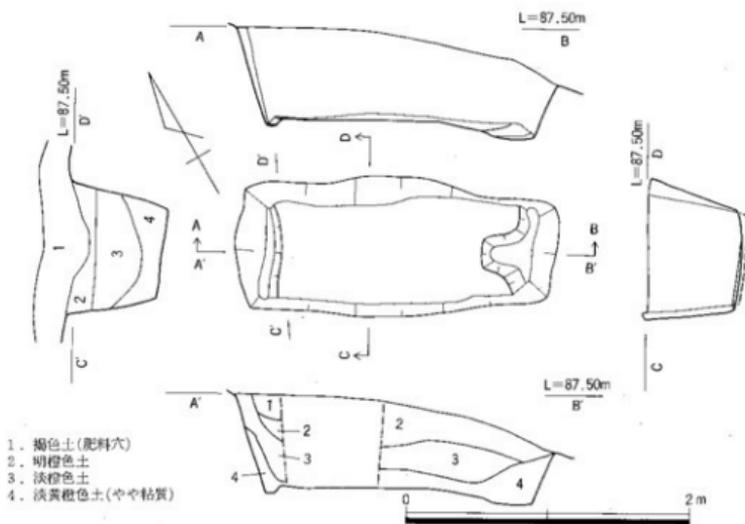
両側板の間隔は西側の方が東側に比べてやや広がり、底面もわずかであるが西側に高い傾高にあることからみて、頭位は北西であると推察される。

(2) 第2主体部 (第5・8図、図版3)

第1主体部の北側に隣接して検出された遺構である。主軸はN63°Wにとり、南側を第1主体部の墓壇掘方を切って作られている。検出面からは第1主体部との新旧を判断しえなかったが、土層断面観察により本主体部が後行する遺構であると認められた。墓壇の長軸243cm、短軸104cm (推定)、検出面よりの深さ66cmを測る。墓壇平面は隅丸長方形を呈する。断面形は、壁部がゆるやかに立ち上り逆台形状を呈している。底面は、やや不整な隅丸長方形を呈し、北東隅と南西隅は角張っている。壇底中央部はやや窪み気味である。壇底両端に小口板の掘り込み穴がみられる。東側の小口穴は中央部にあるが、西側のそれは南側に片寄って位置する。これは、東側では小口板が側板に挟まれているが、西側では側板と小口板が交互に組み合わされていたものと推察される。壇底東側の掘り込みは不整な長円形を呈し、長軸54cm、短軸11cm、深さ3cmを測る。西側の小口穴は、弧状のやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸60cm、短軸19cm、深さ8cmを測る。埋置された木棺は箱形木箱で、規模は縦212cm、横66cm、高さ35cm程度と推定される。底面の標高は86.67mを測る。頭位は南東と考えられる。

(3) 第3主体部 (第9図、図版3・6)

墳頂平坦部の南東隅、第1主体部の南1mに位置する。主軸はN59°Wにとり尾根筋から



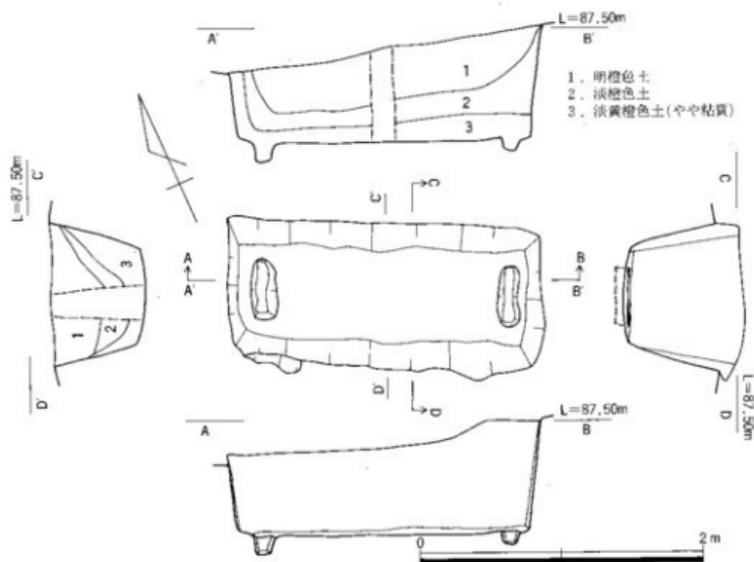
1. 褐色土(肥料穴)
2. 明褐色土
3. 淡褐色土
4. 淡黄褐色土(やや粘質)

第9図 第3主体部遺構図

やや外側に作られている。墓壇の長軸229cm、短軸100cm、検出面よりの深さ64cmを測る。墓壇平面はやや不整な長方形を呈しているが、東側は丸みをもつ。断面形状は逆台形を呈するが、北側長壁の東側では垂直に立上る。壇底面は隅丸長方形を呈し、壇両端に小口穴がみられる。東側の小口穴は凸状の平面形をなし、長軸54cm、短軸14cm、深さ10cmを測り、凸状部は壇底中央部に36cm張り出している。西側の小口穴は、長軸65cm、短軸11cm、深さ5cmを測る。埋置された木棺は、小口穴の状況よりみて、両小口板が側板を挟み込んだ箱形木棺と考えられる。規模は縦190cm、横70cm、高さは40cm程度と推定される。底面の標高は86.84mを測り、頭位は北西と考えられる。

(4) 第4主体部 (第10図、図版4)

墳頂平坦部の南西隅にあり、尾根筋より外れて位置する。主軸はN63°Wである。第3主体部の西0.5mに位置し、尾根筋を挟んで平坦部の両端に作られている。墓壇の長軸223cm、短軸104cm、検出面よりの深さ81cmを測る。墓壇平面はやや不整な長方形を呈している。断面形状は逆台形状を呈するが、両側小口壁はほぼ垂直に立ち上る。壇底面は長方形を呈し、小口壁寄りに小口板用掘り込みがみられる。東側の小口穴は、小口壁より6cm程離れ隅丸長方形を呈する。規模は長軸43cm、短軸13cm、深さ8cmを測る。西側の小口穴は、小口壁より10cm離れ隅丸長方形を呈し、長軸43cm、短軸17cm、深さ11cmを測る。小口穴の位置が



第10図 第4主体部遺構図

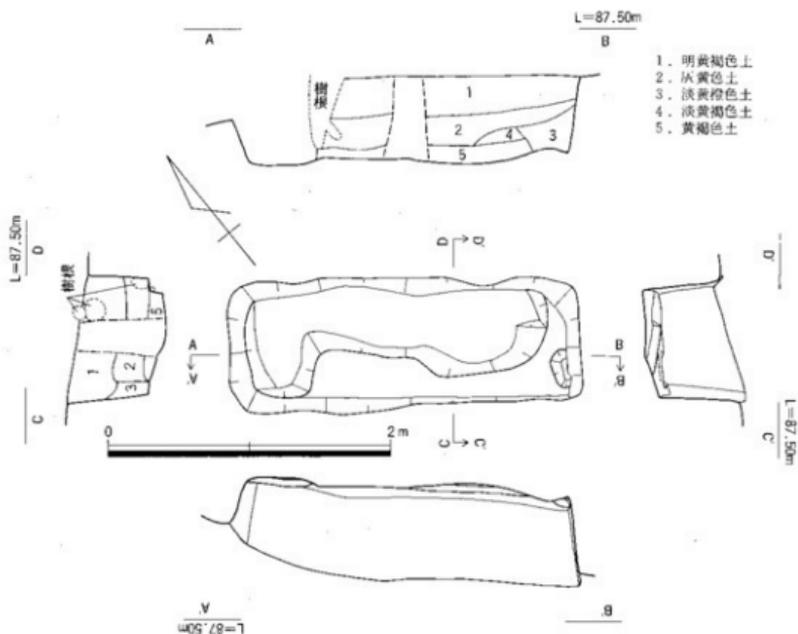
らみて、埋置された木棺は組み合せ式と考えられる。規模は、縦205cm、横60cm、高さ20cm以上と推定される。底面の標高は86.7mを測り、頭位は南東と考えられる。

(5) 第5主体部（第11図、図版4・6）

第2主体部の北側0.3mに隣接し、墳頂平坦部のもっとも北寄りに位置する。主軸はN54°Wにとり、尾根筋に直交して作られているが、第1・第2主体部の主軸に対しやや角度をつけている。墓壇の長軸249cm、短軸96cm、検出面よりの深さ67cmを測る。墓壇の平面形はやや不整な隅丸長方形を呈している。縦断面は逆台形状をなすが、南北の長壁は垂直に立ち上る。壇底面は隅丸長方形する。底面の南側と東側には、わずかに段を形成し、北寄りに窪みをつけており木棺の痕跡と考えられる。墓壇内埋土の状況も、棺の裏込めも観察されることにより箱形木棺が埋置されていたと推定される。木棺は、壇底中央部ではなく北側の長壁に接して埋置されていた。規模は、縦200cm、横60cm、高さ35cm程度と推定される。底面の標高は86.5mを測り、頭位は南東と考えられる。

(6) 第6主体部（第12図、図版5・6）

第1・第2主体部の東側0.3mに隣接し、墳頂平坦部東側縁端の斜面に位置する。主軸は

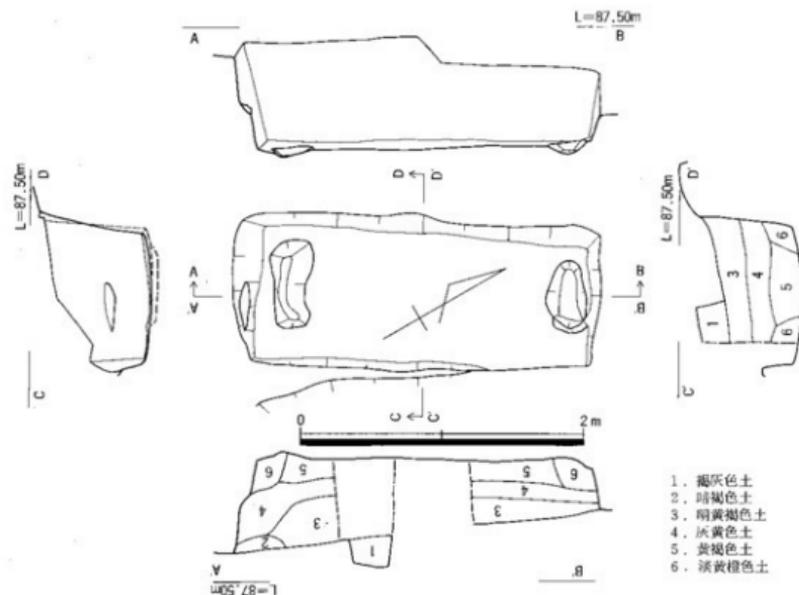


第11図 第5主体部遺構図

N30°Eにとり、第1～5主体部の主軸に直交して作られている。東側の長壁は第7主体部と切り合うが、占有する位置からみて先行する遺構と考えられる。墓壇の長軸261cm、短軸109cm、検出面よりの深さ76cm(最大値)を測る。墓壇平面形は長方形を呈する。縦断面は逆台形を呈するが、東西の長壁はほぼ垂直に立ち上る。南側小口壁はわずかに丸みをもっている。壇底面は長方形を呈し、小口壁寄りに小口板用掘込みがみられる。南側の小口穴は、壁部より10cm離れやや湾曲している。規模は長軸63cm、短軸21cm、深さ5cmを測る。北側の小口穴は、壁部より5cm離れて位置し、やや下整な長楕円形を呈する。長軸52cm、短軸29cm、深さ9cmを測る。両小口穴が壁部より離れて位置することから本主体部は組み合せ式木棺が埋置されていたと推定される。規模は縦237cm、横45cm、高さ25cm程度と考えられる。底面の標高は86.6mを測り、頭位は南をとるものと思われる。

(7) 第7主体部(第13図、図版5)

第6主体部の東側に隣接して位置する。墳丘東斜面に位置する第6・第7主体部は、若干の盛土の上から掘り込まれた墓壇と思われるが、現況ではその全てが流失している。主軸はN25°Eにとり、第6主体部の主軸に対しわずかに角度をもつため北側で切り合いが生じている。墓壇の長軸260cm(推定)、短軸120cm(推定)、検出面よりの最大深さ63cmを測る。

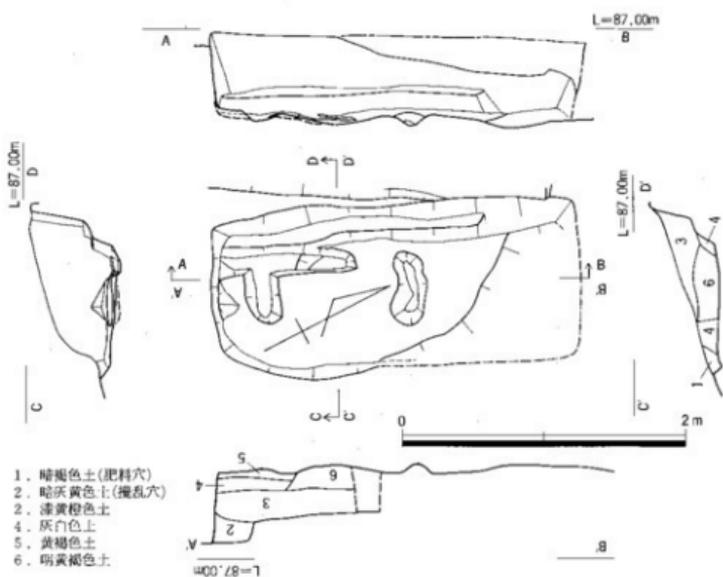


第12図 第6主体部遺構図

断面形は逆台形を呈し、西側長壁の中ほどには幅6~12cmの段をつけ、二段掘りの墓壇状を呈している。墓壇平面形は隅丸長方形を呈する。壇底面は隅丸長方形で、底面に小口板用掘り込みと側板固定用の溝が一部にみられる。小口穴は、壇底南寄りと中央部にみられた。南寄りの小口穴は、壁部より20cm離れた位置にあり長軸33cm、短軸24cm、深さ6cmを測り側板固定用の溝と継がる。中央の小口穴はやや湾曲し、長軸52cm、短軸20cm、深さ6cmである。側板固定用の溝は、西側長壁に沿ってつくられ南側小口壁に達する。規模は、長軸97cm、短軸17cm、深さ4cmを測る。北側小口壁は流失しており、小口穴が存在していたかどうかは不明である。本主体部には組み合せ式木棺が埋置されていたと推定され、規模は縦240cm(推定)、横45cm、高さ20cm程度が考えられる。両小口穴の間隔は、110cmを測り、北側の小口板が側板の中央部まで入り込んだ組み合せ式木棺であったと考えられる。底面の標高は86.33mを測り、頭位は北と推察される。

2. その他の遺構 (第3図)

下坂1号墓の墓城外である北側斜面下方において、中世のものと思われる地山カット面を検出した。カット面は、地山の岩盤を切削して平坦面をなし、丘陵尾根の先端部に位置する。平坦部はやや湾曲気味につくられており、その両端は尾根の両端までのびている。規模は、長軸約9m、短軸約2mを測る。カット法面の比高差は約0.5mである。カット面



第13図 第7主体部遺構図

西端部においては、1.5m四方（推定）の窟みがつくられており中世墓である可能性も充分考えられる。この窟みの南側および周辺からは、多量の炭と焼土の広がりが見られた。

第2節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生式土器・須恵器・中世陶器・古銭などがみられたが、遺構に伴うものは弥生式土器のみであった。須恵器・中世陶器等は、調査地が昭和初期による果樹園によって攪乱されていたため表土中に散在していた。

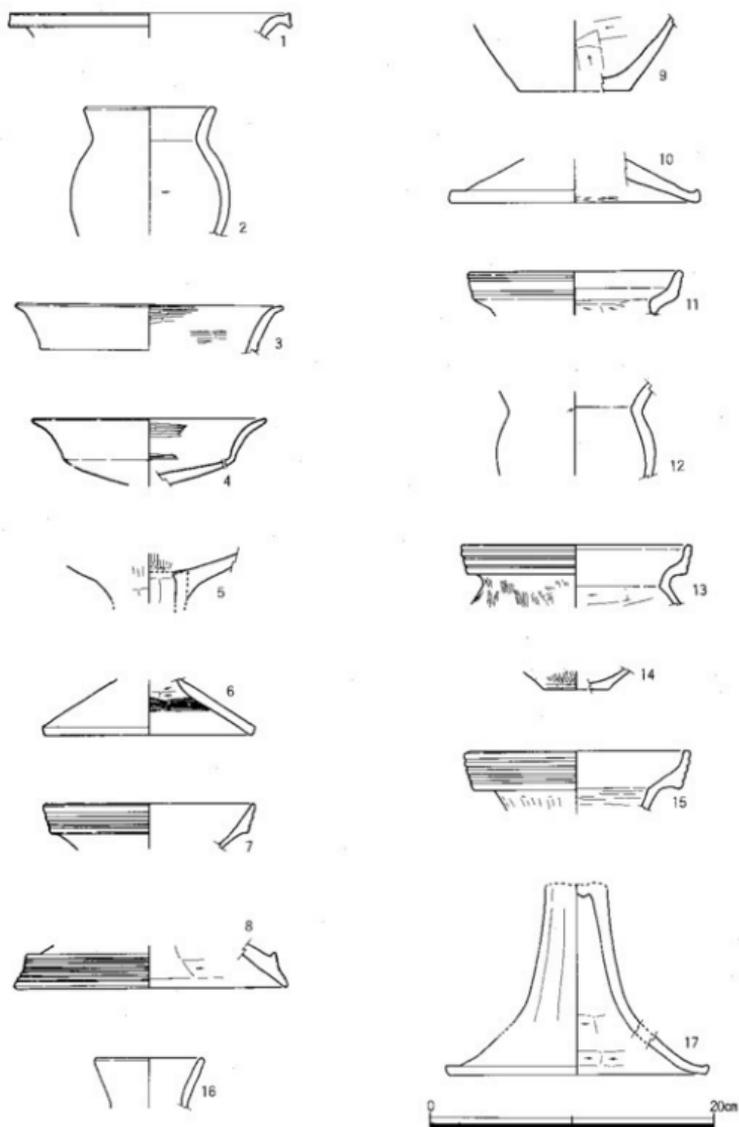
遺構に伴う遺物も、全て墓壇上面の供献土器であるが、やはり果樹園による攪乱で一部のみは遺存でほとんどが墳丘斜面よりの出土であった。

弥生式土器（第14図、図版7）

土器の出土した遺構は、第1・2・3・4・6・7主体部の6基である。土器の出土状態は、第14図1のみ墓壇内埋土より出土し、他のものは墓壇上面あるいは周辺より出土したもので供献土器と考えられる。第14図16・17は墓域外より出土したものであるが、墓域内よりの転落遺物である。

第14図1～8は、第1・2主体部に伴う遺物と考えられる。1は外反する口縁部をもち端部が下方に肥厚する壺口縁部片である。2は、「ハ」の字状に開く口縁部をもつ小型壺である。3～5は、内面にヘラミガキを施した高杯である。杯部は強く外湾する。6は高杯脚部である。「ハ」の字状に大きく開く脚部で、内面上方にはハケメを残す。7・8は器台の受部と脚部である。受部内面はヘラミガキを施し、外面に櫛描き平行沈線をめぐらす。脚部内面はヘラケズリで調整し、外面に櫛描き平行沈線をめぐらす。9は、第3主体部墓壇上面出土の底部である。底部から胴への立ち上りから甕の底部とも考えられる。10は、第4主体部墓壇上面より出土の蓋形土器である。端部は上方につまみ出している。11・12は、第6主体部墓壇上あるいは周辺より出土したものである。11は、甕の口縁部で口縁部外面にヘラ描き沈線を2条めぐらす。端部は直立気味に斜め上方に立ち上る。12は、小型壺である。13・14・15は、第7主体部の墓壇上面より出土したものである。13は、甕口縁部片で直立気味に立ち上る口縁部である。外面に3条の櫛描き平行沈線をめぐらす。14は甕の底部と思われる。底部から胴部へつづく屈曲部は横方向のヘラミガキをし、上部は縦にヘラミガキを施す。15は、器台の受部である。内外面に赤彩を施している。直立気味の口縁部外面には4条の櫛描き平行沈線をめぐらす。16・17は、墓域外の丘陵北側斜面より出土したものであるが、出土地点より推定し第5主体部よりの転落遺物と考えられなくもない。16は、短かく直立気味に立ち上る口縁部をもつ小型壺である。17は、外湾気味に裾広がりを開く高杯脚部である。外面はていねいなナデ調整を施す。

以上の土器は、大概弥生時代後期中葉から後葉にかけての所産と考えられる。



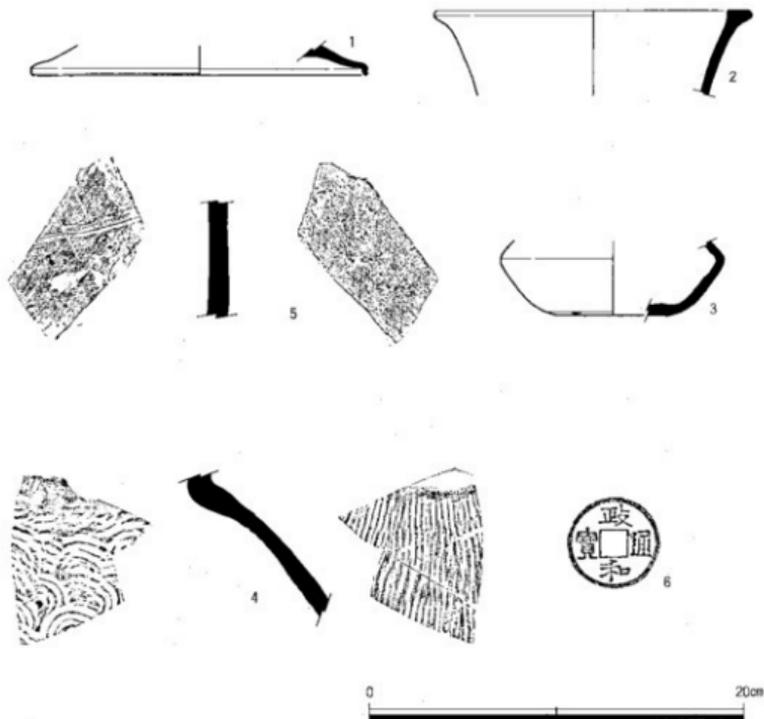
第14图 下坂1号墓出土遗物实测图

その他の遺物（第15図、図版8）

下坂1号墓の調査では、弥生時代の木棺墓以外からも遺物の出土をみた。遺物は、墳丘斜面や丘陵斜面などから須恵器・陶器・古銭などがみられた。これらは丘陵先端部の中世遺構（カット面）に伴う遺物と考えられる。

第15図1は、須恵器蓋である。平坦な頂部よりやや屈曲して縁端部につづく。縁端部は「く」の字状に屈曲する。2は、鉢である。やや直立気味に立ち上る口縁部で上端は平坦部をもち、外方へ肥厚する。3は、壺の体部である。底部はヘラ切り離しの後ヘラケズリで調整している。4は、大型壺の肩部上半である。外面平行タタキ、内面青海波タタキを施す。5は、備前系の所産と思われる甕体部片と思われる。内面にハケ状工具痕がみられる。6は、「政和通宝」北宋で、初銭年はA.D1111年である。

以上の遺物は、須恵器と備前系陶器との間で年代のばらつきが認められるが、中世遺構の年代としては、おおむね室町時代と推察される。



第15図 その他の遺物実測図

第 4 章 ま と め

今回の発掘調査によって、当該地より弥生時代木棺墓 7 基、中世遺構 1 ケ所が検出された。調査の結果については、前章までに述べたとおりである。ここでは、調査によって惹起された若干の問題点を述べてまとめたい。

弥生時代木棺墓群について

今回の発掘調査では、当初、当該地の地形の高まりを考えて古墳とし扱っていたが、調査を進行する段階で弥生時代に属する遺構群であることが観察された。調査によって、遺構の性格を確認しえたことで、弥生時代の墓制に関する貴重な資料を得ることができた。

弥生時代木棺墓群は、私都川を見下す舌状にのびた丘陵上に所在する。この丘陵は、先端部で北西に派生し、一段高度を下げてなだらかな小丘陵があり、木棺墓群はこの先端部に営まれていた。古墳築造にも十分な立地条件ともいえる。県内では弥生時代の墳墓の検出例が僅かづつではあるが知られてきている。県東部においては、鳥取市西北部の湖山池南岸の西桂見遺跡⁽¹⁾や桂見墳墓群⁽²⁾などが知られる。また、鳥取市南部の紙子谷遺跡⁽³⁾でも検出例がみられる。これらの墳墓群は、いずれも丘陵頂部に営まれた墳墓であり、下坂 1 号墓のように丘陵突端部に営まれた類例はない。しかしながら、近年の周辺地域での諸調査において、おおむね弥生時代後期以降の墳墓は、丘陵上に立地することが知られており、本例のような墳墓が増加することは十分に予測される。

下坂 1 号墓は、7 基の木棺墓によって構成され、丘陵部の溝と基底部によって区画された墓域内に一定の規格性をもって営まれていた。

墓域は、尾根筋に直交する溝と地山の削り出しによって作られた平坦部（墓底部）とによって、一辺 12m の方形に区画されたものである。この地山の切削によって墳丘を造り出す手法は、いわゆる方形台状墓であるが、本例の場合、地山の削り出しを行っており十分に意識したものであるといえる。

県下における方形台状墓は、倉吉市大谷・後口谷墳丘墓⁽⁴⁾が知られ、地山整形によって方形に造りだした弥生墓は鳥取市桂見墳墓群、同紙子谷遺跡門上谷地区⁽⁵⁾において知られる。

木棺墓群の配置状況について触れておく。群中最大規模をもち、棺材安定のための掘り込みを有する第 1 主体部が、墓域の溝あるいは尾根筋に直交する主軸をとり中央部に位置する。他の木棺墓は、この第 1 主体部を中心として墓域内に作られているが、主軸方位は東西方向（第 1・2・3・4・5 主体部）と南北方向（第 6・7 主体部）の 2 群に分かれる。このうち南北方向の木棺墓は、他の木棺墓に制約されて作られたものと思われるが、墓域内を意識して営まれた可能性が指摘できる。

これらの木棺墓群は、墳底に納められた木棺の型式にいくつかの差異が認められた。木棺型式は、墳底にみられる小口穴と棺材固定用の掘り込み等から組み合わせ式木棺を主流とするが、第5主体部例のように小口穴をもたないものも認められる。小口穴の配置状況により、本例では以下の棺材組合せが考えられる。

Aタイプ…両側板が小口板を挟んで棺長軸方向に突出するもの(ⅠⅠⅠ)、Bタイプ…側板も小口板も突出せず箱形になるもの(□□□)、Cタイプ…側板と小口板が規則的に組合わされず井桁状を呈するもの(ⅡⅡⅡ)、Dタイプ…またAタイプの類似例として、他方の小口板が棺の中ほどに入り込み仕切状を呈する(ⅢⅢⅢ)ものが認められた。以上の組合せのうち、Aタイプは第1・4・6主体部、Bタイプは第3・5主体部、Cタイプは第2主体部、Dタイプは第7主体部が該当する。

これらの組合せの中にあつて、第1主体部は墓壇小口壁の四隅にアーチ状の切込みを設け、そこに棺材をはめ込んで固定している。また、側板の外側にも側板固定用の溝を設け二重木棺の様相を呈するなど、朝鮮半島にみられる木槨墓を意識したと考えられ、群中では最も入念な埋葬施設であるといえる。

このように一定の墓域にあつて、種々の棺型式がみられたことは、被葬者の出自の差あるいは集団中での差が墓壇および棺構造に反映しているものと思われ、下坂1号墓の性格の一端を示すものであろう。

さて、本木棺墓群の築造時期であるが、いくつかの墓壇上あるいは周辺で検出された土器から考えれば、弥生時代後期後半に推定され、青木遺跡の土器編年のⅢ期新と考えられる。おおむね3世紀後半代の年代が与えられよう。

県内東部では、本例のように一定墓域内に多数の埋葬施設が作られた弥生墓は、鳥取西桂見遺跡⁽⁵⁾、桂見墳墓群⁽⁹⁾、紙子谷遺跡⁽¹⁰⁾で知られるのみである。この内、桂見墳墓群の弥生墓は貼石をもつ方形墓で、西桂見遺跡の四隅突出型方形墓と共通した観察で作られたものである。紙子谷遺跡の門上谷地区にみられる方形墓は、地山削り出しによって作られた弥生墓で、多数の埋葬施設をもっており、本例に通有する特徴を示している。今回、確認された下坂1号墓の木棺墓群の検出は、今まで鳥取平野周辺にのみ知られていた弥生時代の墓制が、私都川流域にまで広がりをみせていることが判明した。このことは、私都川流域における弥生時代後期後半の弥生時代社会の多様性、重層性を見てとることができる。また、同地域あるいは周辺地域で同種の遺跡の確認例が増加するものと考えられるが、本例とともに今後の課題としたい。

表1 弥生時代遺物観察表

種別番号	器種	法 量 (cm)		形 状・調 整 の 特 徴	胎 土	焼 成 色	調 査 者	遺物番号
		口 径	器 高					
3	壺	20.0	(1.7)	口縁部内外面ヨコナデ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。	015
7	壺	9.3	(9.2)	口縁部内外面ヨコナデ。外裾部ナデ。内面胴部ヘラケズリ。	細砂を含む	良好	内外面明赤褐色。内外面赤彩。	001 019 022
10	高 杯	18.9	(3.25)	口縁部外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミギキ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。内面スス付着。	010
18	高 杯	16.6	(4.6)	受部口縁部内面。横方向のヘラミギキ。受部内面ヘラミギキ。外側ていねいなナデ。	細砂を含む	堅緻	内外面淡褐色。	007
11	高 杯		(3.55)	裾部外面ヘラミギキのちナデ。内面ヘラミギキ。胴部外面ヘラミギキ。内面ナデ、シボリ有。	細砂を含む	良好	外面淡褐色。内面淡褐色〜暗褐色。	001
14	高 杯 (脚)			外面ナデ。内面上部ヘラケズリ及びハケメ、胴部内面ナデ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。	007
16	器 台 (受部)	15.0	(3.2)	口縁部外面に3条の沈線。受部外面ナデ。口縁部及び受部内面ていねいなナデ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。	007
17	器 台 (脚部)	19.1	(3.1)	台部外面ナデ。裾部外面に6条の帯線平行沈線。台部及び裾部内面ヘラケズリのち、ていねいなナデ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。外面黒彩。	007
4	瓶 部		(4.66)	外蓋及び膝地面ナデ。内面ヘラケズリ及びナデ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。	013
9	壺	17.8	(3.1)	口縁部外面ヨコナデ及びナデ。内面ハケメのちナデ。	細砂を含む	やや軟	内外面淡褐色〜褐色。	014
2	壺	15.2	(3.15)	口縁部内外面ヨコナデ。外面3条の沈線。内面胴部ヘラケズリ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。	019 020
8	壺		(5.0)	外蓋部以下ハケミのち、ていねいなナデ。内面胴部以下ヨコナデ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。外面赤彩。	005
1	壺	16.4	(4.3)	口縁部外面ヨコナデ及び3条の沈線。胴部ナデハケ。口縁部内面ヨコナデ。裾部ヘラケズリ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。内面明赤褐色。	019
5	底 部		(1.3)	外面ヘラミギキ及びナデ。内面ナデ。膝地面ナデ。	細砂を含む	良好	外面淡褐色。内面明赤褐色。	019
15	器 台	16.0	(4.2)	口縁部外面に4条の沈線。内面ナデ。受部外面ナデヘラミギキ。内面ヨコヘラミギキ。	細砂を含む	良好	内外面赤褐色。	019
6	壺	7.5	(3.6)	口縁部内外面ヨコナデ。	細砂を含む	良好	内外面淡褐色。	021
13	高 杯 (脚)			口縁部外面ヘラミギキ。内面ナデ。脚部外面ナデ。内面ヘラケズリ。	細砂を含む	やや軟	外面淡褐色。外面赤彩。	017 021

表2 その他の遺物観察表

種別番号	器種	法 量 (cm)		形 状・調 整 の 特 徴	胎 土	焼 成 色	調 査 者	遺物番号
		口 径	器 高					
1	壺	19.0	(1.6)	口縁部外面不整ナデ。内面ロクロナデ。天井部内面不整ナデ。	細砂を含む	堅緻	内外面淡褐色。	005
2	鉢	17.0	(4.6)	口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	内外面淡褐色。	006
3	壺		(4.05)	肩部内外面ロクロナデ。底部外面ヘラ切り磨しのちヘラケズリ。内面不整ナデ。	細砂を含む	堅緻	内外面淡褐色。	009
4	壺			外面平行文タテキ。内面青漆文タテキ。	細砂を含む	堅緻	内外面淡褐色。	005 006
5	鉢			内面ナデ。	細砂を含む	堅緻	内外面赤褐色。	016

表3 弥生時代木棺墓一覽表 (数値の単位はcm)

木棺墓名	埋 葬 施 設				出 土 遺 物		備 考
	平 面 形 態 ()内は主軸方位	長軸×短軸×深さ ()内は推定値	埋葬方法	棺 構 造 (長さ×幅×高さ)	出土箇所	種 別別	
第1主体部	隅丸長方形 (N68° W)	265×(135)×86	木棺直葬	組合せ式 240×64×49	墓壇上面	小型壺・高杯 壺・器台	小口穴・側板溝 頭位(北西)
第2主体部	隅丸長方形 (N63° W)	243×(104)×66	木棺直葬	箱 型 201×85×33	墓壇上面	器台・高杯	小口穴 頭位(南東)
第3主体部	長 方 形 (N59° W)	229×100×64	木棺直葬	箱 型 191×70×(40)	墓壇上面	壺	小口穴 頭位(北西)
第4主体部	長 方 形 (N63° W)	223×104×81	木棺直葬	組合せ式 204×64×不明	墓壇上面	壺	小口穴 頭位(南東)
第5主体部	隅丸長方形 (N54° W)	249×96×67	木棺直葬	箱 型 220×73×30			小口穴 頭位(南東)
第6主体部	長 方 形 (N30° E)	261×109×76	木棺直葬	組合せ式 190×45×23	墓壇上面	小型壺	小口穴 頭位(北)
第7主体部	隅丸長方形 (N25° E)	(260)×(120)×63	木棺直葬	組合せ式 (240)×45×(20)	墓壇上面	器台・壺 (赤彩)	小口穴・側板溝 頭位(北?)

本 文 註

- (1) 鳥取市教育委員会「西桂見遺跡Ⅱ」1984年
- (2) 鳥取市教育委員会「桂見墳墓群」1984年
- (3) 1987年鳥取市教育委員会調査(鳥取市教育委員会『鳥取新都市埋蔵文化財調査現地説明会資料』)
- (4) 倉吉市教育委員会「大谷・後口谷墳丘墓」1985年
- (5) 註2文献
- (6) 註3文献
- (7) 鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」1978年
- (8) 註1文献
- (9) 註2文献
- (10) 註3文献

圖 版



(1) 下坂1号墓調査前全景 (南より)



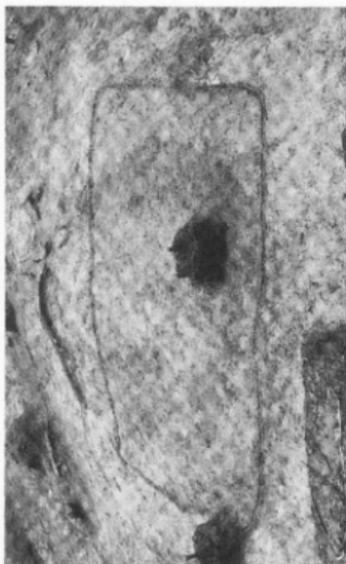
(2) 下坂1号墓調査風景 (南より)



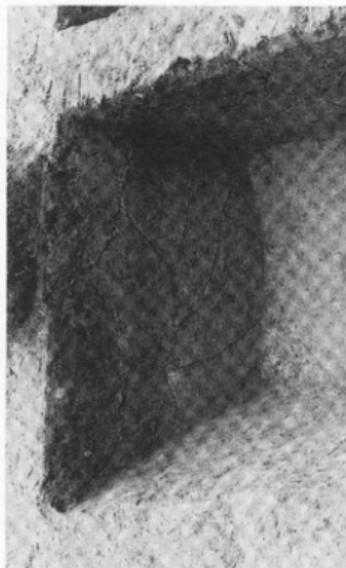
(3) 下坂1号墓表土除去後全景 (南より)



(4) 下坂1号墓調査後全景 (南より)



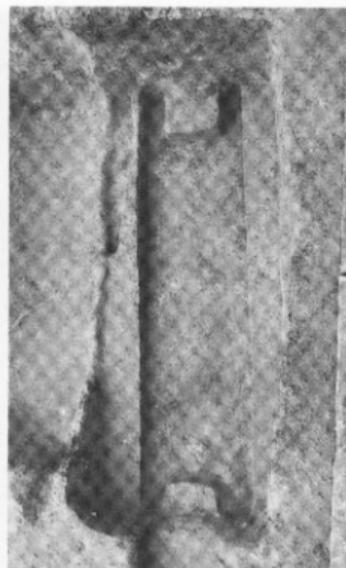
〔1〕 第1・2主体部掘方検出状況（南より）



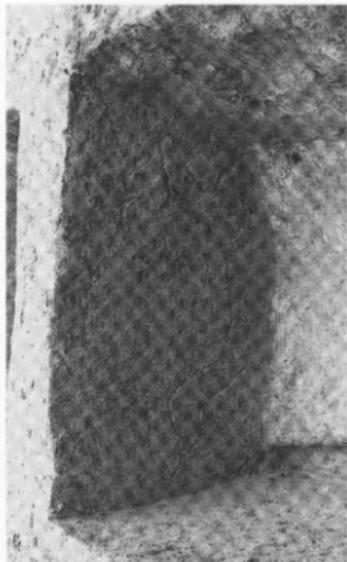
〔2〕 第1主体部土層断面状況（東より）



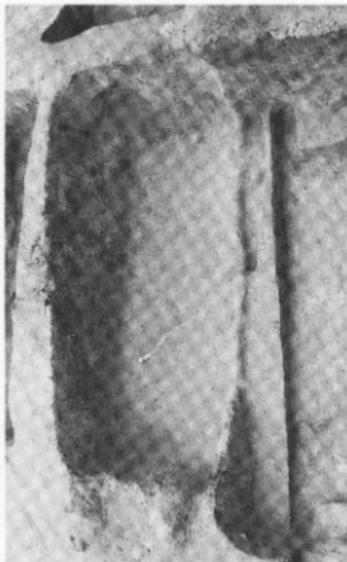
〔3〕 第1主体部本館裏検出状況（北より）



〔4〕 第1主体部遺構検出状況（南より）



〔1〕 第2主体部土層断面状況 (東より)



〔2〕 第2主体部遺構検出状況 (南より)



〔3〕 第3主体部掘方検出状況 (南より)



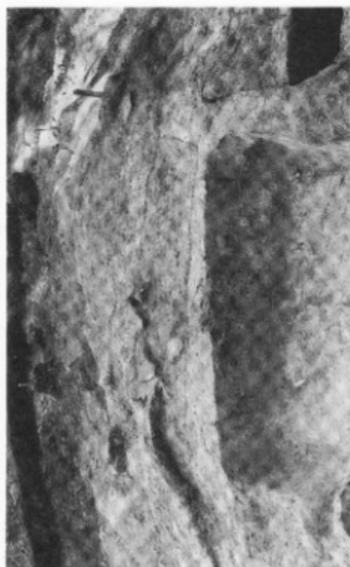
〔4〕 第3主体部遺構検出状況 (南より)



〔1〕第4主体部掘方検出状況（南より）



〔2〕第4主体部遺構検出状況（南より）



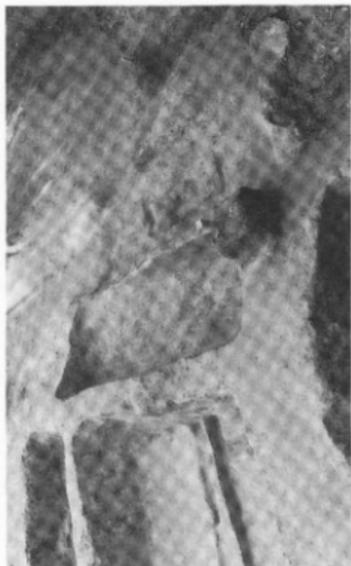
〔3〕第5主体部掘方検出状況（南より）



〔4〕第5主体部遺構検出状況（北より）



〔1〕第6・7主体部掘方検出状況（南より）



〔2〕第6・7主体部遺構検出状況（南より）



〔3〕第6主体部遺構検出状況（東より）



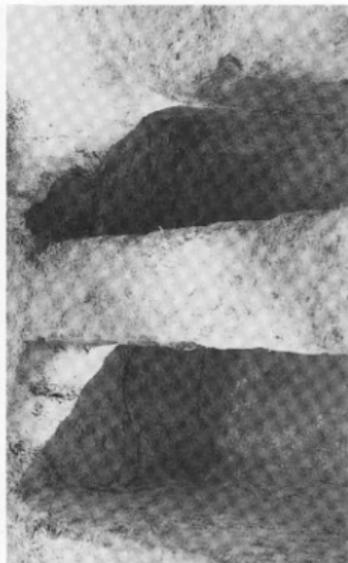
〔4〕第7主体部遺構検出状況（東より）



〔1〕溝状遺構土層断面状況（東より）



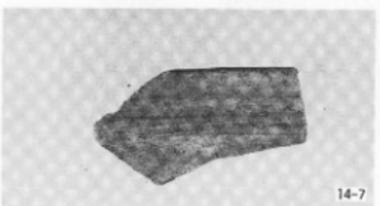
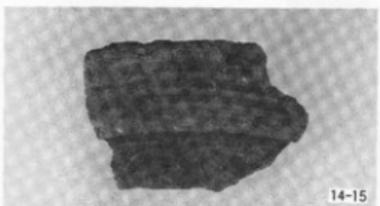
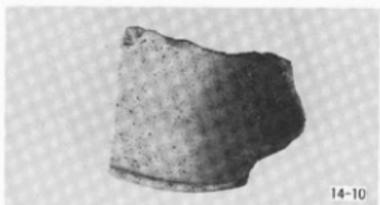
〔2〕第3主体部土層断面状況（東より）

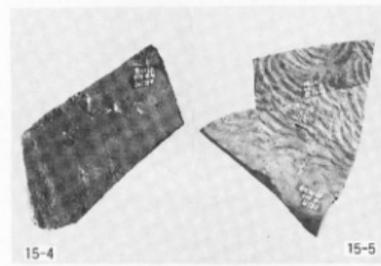
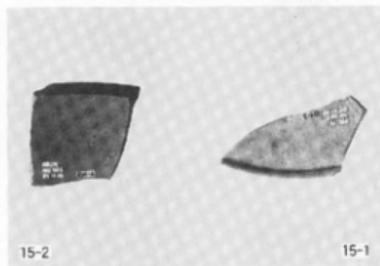
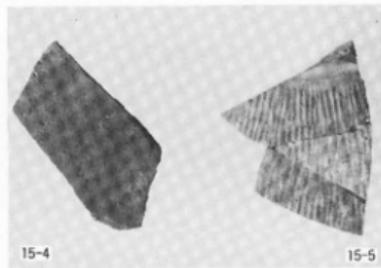
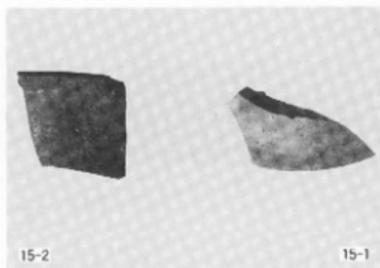


〔3〕第5主体部土層断面状況（東より）



〔4〕第6主体部土層断面状況（北より）





郡家町文化財報告書12

下 坂 1 号 墓

発 行 1990・3

発行者 郡家町教育委員会
〒680-04

鳥取県八頭郡郡家町郡家493番地
TEL(0858)72-0201(代表)

印 刷 綜合印刷出版株式会社